

2023年度国際研究フォーラム

International Research Forum 2023

見られることで何が変わるのか
—ツーリズムと宗教文化

To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture

報告書

Report

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

Institute for Japanese Culture and Classics,
Kokugakuin University

2025.2

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學



アクロポリス博物館のエントランスと、基礎部で発掘された遺跡（石本東生撮影。）



サントリーニ島北部イア地区街並み（石本東生撮影。2012 年。）



STAGE#120 (沈昭良攝影。)



STAGE#68 台南 台灣 |
Tainan, Taiwan (沈昭良攝影。2008 年。)
《STAGE 攝影集》
(2011) 所收



旧市街広場。写真中央は聖マリア教会（加藤久子撮影。2018 年。）



「オスカー・シンドラーの工場」博物館の入り口（加藤久子撮影。）



江戸時代後半の地図を明治時代に写した物（ケイレブ・カーター蔵。写真は Hill, Lachlan 撮影。）



YAMAP の修験道のトライアルツアーで山伏が英彦山の道を歩いている（Him, Han Cheuk 撮影。2022 年。）

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2023 年度国際研究フォーラム
「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」
報告書

目次

はしがき	7
開催概要	9
国際研究フォーラム	
「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」	
「「ギリシャ」：神話とキリスト教の舞台そして観光—文化遺産を活かす共存—」	石本東生 11
「写真と社会風景：『STAGE』『SINGERS & STAGES』『台湾綜芸団』を例に」	沈昭良 SHEN Chao-Liang 27
「共生の物語をつむぎなおす—ポーランドに出現した 2.5 次元のユダヤ人街—」	加藤久子 41
「自己の回復、山里の回復：修験道とツーリズムの交錯 Restoring the Self, Restoring the Mountain Villages: Intersections Between Shugendō and Tourism」	ケイレブ・カーター Caleb CARTER 51

はしがき

本報告書は、2023年12月に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催で開催された国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」における議論をまとめたものである。

日本文化研究所は、設立当初より、日本の宗教文化について、国際比較の視点を組み込みながら、研究を行うことを一つの主要な目的としており、近年の国際研究フォーラムでは、特に視覚文化との関わりにおいて宗教文化を捉え直すことを試みてきている（「見えざるものたちと日本人」2020年度、「日本の宗教文化を撮る」2021年度、「ミュージアムで見せる宗教文化」2022年度。なお、これらの報告書も日本文化研究所のウェブサイトで公開されている）。

これらのフォーラムでは、「見る」「撮る」「見せる」といった営みを念頭に置いて、そうした営みと宗教文化の関わりを問題としてきたが、本フォーラムは、これらを受けて「見られる」ということを論点として取り上げることとした。

では、現代において、宗教文化が「見られる」のはどのような局面であろうか。企画を議論する際に、前述の「見る」「撮る」「見せる」といった営みと一層密接に結びつくようになってきているツーリズムを主題とすることが提案され、ツーリズムと宗教文化が交錯する場において、往還的なまなざしを受けて、どのような相互変容が生じているのか——見られることで何が変わるのか——という本フォーラムのテーマが設定された。

コロナ禍を経て、今やツーリズムはあらためて隆盛しているように見える。そしてそれは、誰もがスマートフォンを用いて「見る」ものを写真や動画として「撮り」、それをウェブ上で不特定多数に対して「見せる」という現代的な状況と結びついているだろう。四つの報告は、それぞれギリシャ、台湾、ポーランド、修験道、と異なる事例を取り扱うものだが、いずれも、まなざしの問題に目を配りながら、ツーリズムと宗教文化の相互変容を取り上げるものである。本報告書が、現代における宗教文化のあり方を、あらためて考えるきっかけとなれば幸いである。

開催概要

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 2023 年度国際研究フォーラム 「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化 To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」

2023 年 12 月 17 日、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所では、ツーリズムと宗教文化の関わりを議論のテーマとして設定し、「見られることで何が変わるのか」という題名で 2023 年度の国際研究フォーラムを開催した。ツーリズムはツーリストのまなざしと切り離すことができないが、そうしたツーリズムとの関わりにおいて——すなわち「見られる」ことによって——宗教文化がどのように変化し、継承され、あるいは新しい見せ方を取り入れるのか、四つの事例報告を受けて議論した。開催概要と趣旨を以下に記す。

◇国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」

日時：2023 年 12 月 17 日（日）13 時 30 分～17 時 30 分

場所：國學院大學渋谷キャンパス 120 周年記念 2 号館 1 階 2101 教室

報告者（敬称略・発表順）、題目：

- (1) 石本東生 ISHIMOTO Tohsei（國學院大學観光まちづくり学部教授）
「『ギリシャ』：神話とキリスト教の舞台そして観光—文化遺産を活かす共存—」
- (2) 沈昭良 SHEN Chao-Liang（写真家、華梵大學攝影與 VR 設計學系教授）
「写真と社会風景—『STAGE』『Singers & Stages』『台湾綜芸団』を例に—」
- (3) 加藤久子 KATO Hisako（大和大学社会学部教授）
「共生の物語をつむぎなおす—ポーランドに出現した 2.5 次元のユダヤ人街—」
- (4) ケイレブ・カーター Caleb CARTER（九州大学大学院人文科学研究院准教授）
「自分を取り戻す／山里を取り戻す—修験道とツーリズムの交錯」

コメンテーター（敬称略）：

山中弘氏 YAMANAKA Hiroshi（筑波大学名誉教授、日本文化研究所客員教授）

司会：平藤喜久子（國學院大學教授、日本文化研究所所長）

使用言語：日本語

主催：國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

◇開催趣旨：「見られることで何が変わるのかーツーリズムと宗教文化」

宗教とツーリズムは、グローバル化とあいまって、より一層相互に密接に関わるようになり、宗教文化を資源としてツーリズムを振興しようとする試みは、もはや珍しいものではない。それでは、宗教とツーリズムの交錯によって、どのような変化が生じているのだろうか。

宗教は、それが行われる場において、物体としてのモノや、実践としてのコトを伴うため、そもそも「見られる」ものであることになるが、誰もがスマートフォンを用いて日常的に写真や動画を撮り、かつ即座に発信することが可能になったという現代的な状況において、そのように「見られる」宗教は、どのように変容するのか。あるいは何を見せているのか。他方、それを「見る」人々の側も、見ることを通して何らかに変化しているだろうか。

これは、現代社会における宗教の問題であり、必ずしも日本の宗教文化に限定された話ではない。本フォーラムでは、様々な現場で調査・研究を行っている研究者に、宗教とツーリズムの多様な交錯のあり方について報告してもらい、議論を深めたい。

本報告書には、上記の講演における報告内容をもとに、報告者の方々にご執筆頂いた報告要旨を掲載している。そのため、タイトルや内容など、報告の際のものから若干変更されている場合がある。

「ギリシャ」：神話とキリスト教の舞台そして観光 —文化遺産を活かす共存—

石本 東生

(國學院大學観光まちづくり学部 教授)

1. はじめに

今回のテーマである「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」の「見られること」と「ツーリズム (=観光)」という2つのタームは、観光社会学の世界において大変重要な関連性を包含している。というのも、1970年代以降、米国のディーン・マキアーネル、英国のジョン・アーリ、そしてイスラエルのエリック・コーエンなど、世界的に著名な観光社会学者の間では、「観光者から見られる」ことによる地域社会の変容が大きな議論となったからである。具体的には、観光者から「見られる」ことで、地域の町並みや文化、そして生業などの「真正性 (オーセンティシティ)」がどのように変容するのか、というのがその論点である⁽¹⁾。

ところで、筆者は南欧のギリシャに2度留学し、都合10年間首都アテネに滞在した。帰国後も東京に置かれたギリシャ観光省ギリシャ政府観光局に12年勤務し、その後、大学教員に転身した。以降、現在に至るまで、毎年2回のペースでギリシャの現地調査に赴いており、筆者にとって、ギリシャは最も重要な調査研究フィールドである。また、ギリシャは欧州においても屈指の観光大国であることから、今回は、

- ◆ オリンポスの神々の神話そして初期キリスト教発展の舞台でもある「ギリシャ」において、その文化遺産を活かし共存しつつ観光発展に繋げる手法
- ◆ ギリシャ国内観光地における「見られること」による地域文化の真正性の変容の2点に着目して報告をおこなう。

また、これらを論じる具体的な事例としては、

- ◆ 世界遺産「アテネのアクロポリス」の大理石彫刻・遺物
 - ◆ エーゲ海・サントリーニ島におけるキリスト教教会堂の活用
- の2つを取り上げたいと思う。

2. ギリシャの概要

まず、ギリシャという国の概要、基本的なデータを、ごく簡単に述べておきたい。ギリシャはヨーロッパの南東部、バルカン半島の南端に位置している。イオニア海を挟んで西にイタリアがあり、エーゲ海を挟んで東にトルコがある。国の人口は1,046万人（2023年調べ）であり、東京都の人口よりも26%程度少なく、EU加盟国内でも小国の部類に入る。国土面積は約13万2千km²であり、日本の国土の3分の1ほどである。

歴史的には周知の通り、ヨーロッパでも最古と言われる古代エーゲ海文明の発祥の地であり、古典ギリシャ時代、ローマ帝国時代、ビザンティン帝国時代、そしてオスマン帝国時代を経て、19世紀初頭に、あらためて近代ギリシャの独立を果たした。

経済的には、2010～18年の間は、所謂ギリシャ経済危機により、国家経済破綻の窮地にも陥ったが、その後再生して2022年の段階ではGDPが2,175億USドル、日本円に換算すると約32.6兆円という規模になっている。また国の基幹産業は、観光業、海運業、農林水産業が挙げられ、そのうち観光業は、国の実質GDPの1/4を占めるほどの主幹産業である⁽²⁾。外国人観光客の入込数としては、新型コロナの時期を除けば、近年は毎年約3,200万人がこの国を訪れており、小国でありながらも、国際観光の世界ランキングでは、10～12位という屈指の観光大国である。

3. 観光者の「まなざし」による地域文化の変容

3-1. 京都・産寧坂における地域文化の真正性

さて、観光発展による地域文化の真正性の変容について、ギリシャの事例の前に、端的に国内事例を示しておく。

図-1は、京都・清水寺の北東に隣接する「産寧坂」というエリアの一角である。そこは国の「重要伝統的建造物群保存地区」（以下、重伝建と呼称）に選定されており、江戸末期から大正初期に至る時代の建造物群が良好な状態で残されている地区であることから、個別の建物ではなく面的なエリアとして文化財保全の対象となっ



図-1) 京都・産寧坂重伝建地区

ている町並みである。この重伝建の特徴の一つには、建物の外観は維持すべきものの、内部の改変はほぼ自由と言って過言ではなく、用途も都市計画上の用途以外、特段の制限は受けない。よって、多様なテナントビジネスが展開されている。そして、観光統計データからも、この地区は、京都市内においても最も外国人観光客を魅了するエリアとなっている⁽³⁾。

この産寧坂通りでとりわけ賑わいを見せる中心部に、ある京雑貨の人気店が営業している。ところが、当該店舗においては、意外にも「日本製コーナー」という売り場が設けられており、多くの商品には「日本風」という3文字のポップが付されている。つまり、大半の商品が京都製もしくは日本製ではなく、中国を中心とした東アジア、東南アジアの国々がその生産国となっている。他にも、産寧坂や祇園周辺には、レンタル着物店が無数に存在するが、それらの店舗の商品もそのほとんどが、中国および東南アジア諸国の生産品である⁽⁴⁾。

勿論、中国製であることに問題ありと論じたいのではなく、産寧坂という京都観光の重要拠点において展開されている観光ビジネスが、京都の長き伝統文化に貢献しているのかどうかを問いたいのに他ならない。西陣織や京友禅など、貴重な京都の伝統文化の保存・発展には何ら寄与することなく、むしろ悪影響さえ与えかねない「地域文化の真正性の変容」が顕著である。

3-2. 観光社会学の世界における「真正性」議論の整理

観光社会学の世界における、このような真正性の議論は、1970年代頃から活発になった。米国カリフォルニア大学バークレー校の教授であったディーン・マキアーネルによれば、観光の実態は近代人が近代社会の真正性（Authenticity）を探し求める儀式であり、近代社会を映し出す観光の真正性は、提供者が時に観光客を欺くことで演出される、という。これをマキアーネルは「演出された真正性」（Staged Authenticity）と呼んでいる⁽⁵⁾。

一方、英国ランカスター大学教授のジョン・アーリは「観光のまなざし（The Tourist Gaze）」という理論を提起した。本フォーラムでは「見られること」がテーマであるが、アーリは具体的には、観光者の眼差しというのは、実に移ろいやすいもので、新世代の観光者は観光で真正性を探し求めるようなことは、まず一切することなく、心底遊びを楽しむというのが現代の観光者である、と指摘している⁽⁶⁾。

他方、イスラエルのヘブライ大学教授であるエリック・コーエンは、観光が地域文化の崩壊と、地域そのものの破壊を招く過程を詳細に分析した上で、場合によっては、観光は地域文化の保全や再構成、更に地域の持続可能性をもたらし得る。加えて、地域文化は観光により保全されるだけでなく、再構築・再創出も可能であると論じ、これをコーエンは「創発的真正性」と呼称している⁽⁷⁾。

4. ギリシャの事例紹介

4-1. アテネのアクロポリス

① アクロポリス大理石遺物の国外への流出

さて、これ以降、ギリシャにおける具体事例を論じる。

アテネのアクロポリスは、ギリシャの首都アテネのほぼ中心部に位置し、標高156mの石灰岩の上部に城壁を築き、頂上部を平坦化した上で、紀元前447年以降、パルテノン神殿やエレクトيون神殿、ニケ神殿などの神殿群、およびプロピレアなどの建造物が築かれた。その丘は言うまでもなく、古代ギリシャ文明の象徴でもあり、今もギリシャ観光の目玉ともなっている。1987年にユネスコの世界文化遺産にも登録された。

さて、そのアテネのアクロポリス上で最大且つ優れた建築技術によりつくられたのが、図-2内写真のパルテノン神殿である。本報告において特に強調したいのが、このパルテノン神殿の貴重な大理石彫刻やレリーフが不法に略奪され、国外に流出し、今に至るまで返還されていない事実である。



図-2) パルテノン神殿西側近景

パルテノン神殿は、幅が30.6m、奥行きが68.7m、外周には正面と裏面にドーリス式円柱がそれぞれ8本、側面にはそれぞれ17本が配置されており、列柱の内側には回廊と内室とを隔てる内壁が築かれている(図-3)⁽⁸⁾。また、東側正面と西側裏面では、切妻型屋根とエンタブラチュアと呼ばれる水平構造部の間に挟まれた三角形部分の「破風(はふ)」には、元々、古代ギリシャにおける著名な彫刻家フェイディア

スが製作したといわれる豪華な彫刻群が設置されていた。さらに、エンタブラチュアの中
 央部にはフリーズと呼ばれる部分があり、そこは三筋彫のトリグリフとメトープによって構成されていた（図-2・4）。

一般的なギリシャ神殿であればメトープは平面のままで何も施されないことが多いが、しかしパルテノン神殿の場合は、正面、裏面、両側面と全周囲のメトープにギリシャ神話の様々なシーンがレリーフで描かれており、且つ彩色まで施されていた（図-4）⁽⁹⁾。

一方、神殿の内室には、やはり先のフェイディアスが製作したと伝えられる高さ約 12m で黄金に輝くアテネ女神像が祀られていた。このように、パルテノン神殿は、規模においても、建築技術においても、意匠においても当時のギリシャ世界の最高傑作であった。

ところが、現在のパルテノン神殿の破風やメトープには、それらの貴重な彫刻物やレリーフは、ほぼ見られない。既に周知の事実ではあるが、現在それらの大理石彫刻物は英国ロンドンの大英博物館アクロポリス室に収蔵されている。

その原因と経緯はどのようなものなのか。ギリシャは 1453 年より 1832 年まで、東隣のトルコ、当時のオスマントルコに支配されていた。その間、列強の国々からは特命全権大使がイスタンブールに派遣されていた。1800 年には駐トルコ英国大使エルギンという伯爵が着任しており、このエルギン伯爵は着任直後から、アテネのアクロポリスの調査を開始していたという。そしてその数年後、任期を終えてイギリスに帰

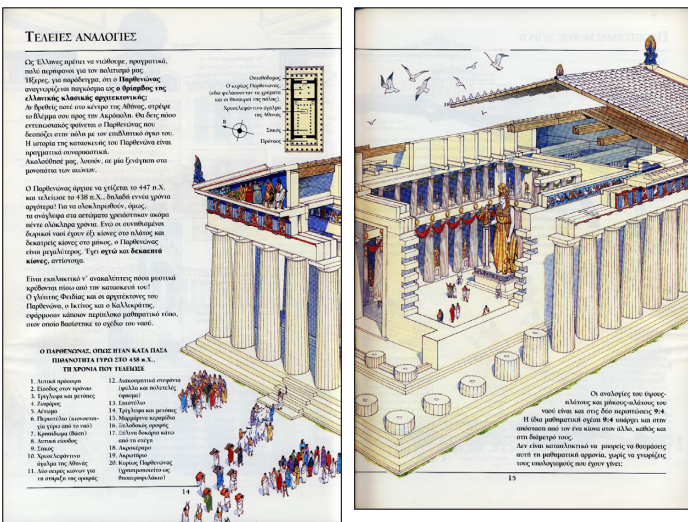


図-3) パルテノン神殿の外観と内部：ドーリス式の柱が 46 本の周柱式神殿

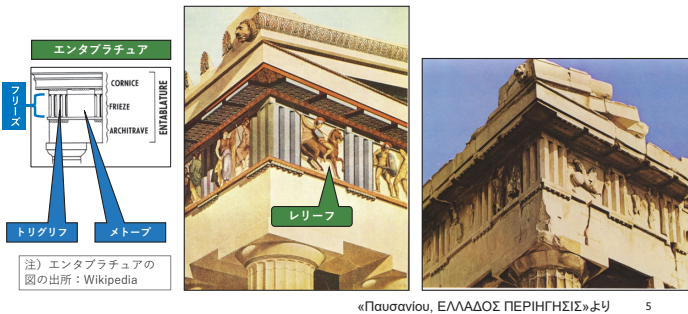


図-4) パルテノン神殿の「エンタブラチュア」とフリーズ部

国する際には、トルコ政府と交渉の上、パルテノン神殿の貴重な彫刻物やレリーフ群を、ただ同然で根こそぎ剥ぎ取り、違法に本国へ持ち帰ったのである。そもそも、イスラム教を奉じるオスマントルコにとっては、偶像は忌み嫌うものであるため、むしろ外国に持ち出されることは望ましくもあった。エルギン卿は帰国後、それらのパルテノン大理石遺物をロンドンの大英博物館の一室に収め、今やそれが同博物館の「アクロポリス室」となっている。

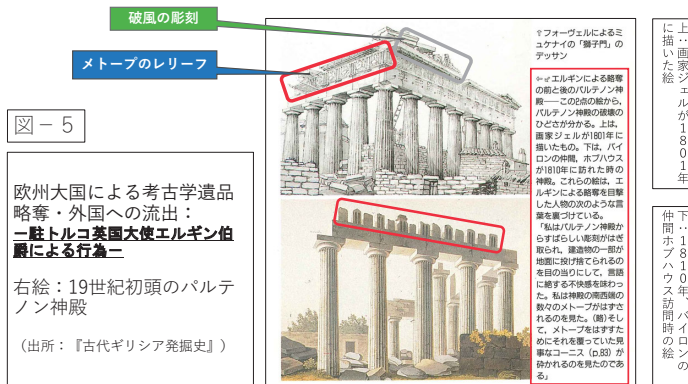


図-5) 19世紀初頭のパルテノン神殿

る。これらの絵画によると、1801年時点では、パルテノンの破風彫刻やメトープのレリーフは確認できるが、1810年時点では全く確認できない状況である。つまり、その間にエルギン卿から持ち去られたということに他ならない。そして同様な被害は、パルテノン神殿に留まらない。

先述の通りアクロポリス上には同神殿の他に、いくつもの神殿が築かれていた⁽¹⁰⁾。図-6のエレクトイオン神殿では、その柱が「カリアティード」と呼ばれる少女像と

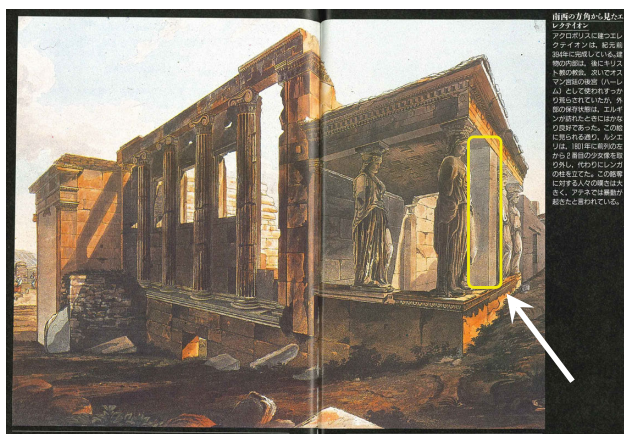


図-6) 19世紀初頭のエレクトイオン神殿

図-5は、ある資料に掲載されている当時の絵画である。上は画家ジェルが1801年に描いたパルテノン神殿の絵であり、下はイングランドの詩人ジョージ・バイロンの仲間である画家のホブハウスが1810年にアクロポリスを訪れた際の絵であ

なっている優美な神殿であるが、その少女像は元来6体存在した。しかし、そのうちの1体はエルギン卿の略奪対象となり、今や「母国」を離れている。その証拠に、エルギン卿の英国帰国後に描かれた大英博物館の絵画(図-7)には、カリアティードの少女像1

体がまぎれもなく描かれている。他にも、同展示室の壁には、パルテノンのメトープ・レリーフ等がところ狭しとはめ込まれている。これらエルギン卿の蛮行に対しては、19世紀初頭、オスマントルコからのギリシャ独立戦争においてもギリシャの義勇兵として戦ったイングランドの詩人バイロンは、激しく批判していたとも伝えられている⁽¹¹⁾。

19世紀初頭
イングランドの
詩人バイロン



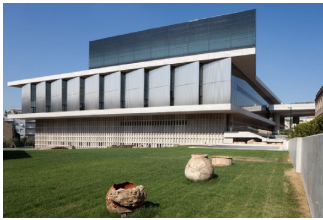
図ー 7) 欧州大国による考古学遺品略奪行為（英国エルギン卿等によるもの）

② アクロポリス博物館の建設と竣工

他方、ギリシャ国民は、これら父祖の重要遺物が他国に流出している事実に対して、過去にも現在にも不断の返還運動を継続している。その返還運動において特に功績を残したのは、1981～89年にかけて文化大臣を務めたメリナ・メルクーリであった。メリナは1960年ギリシャ・米国の共同制作による映画「日曜はダメよ」(Never on Sunday)に主演した女優であり、その後政界入りして、文化相として活躍した。彼女は、英国のみならず他国に不当に持ち出された古代ギリシャ文化遺産返還のため、とりわけ力を尽くしたことで、国民から絶大な支持を得ていた⁽¹²⁾。しかしながら、英国および大英博物館は「ギリシャにはアクロポリスの大理石遺物を安全に収蔵できる博物館が存在しない」ことを理由に、同博物館での所蔵を自ら主張し、肯定してきた。

そのロジックを覆すために、メリナ・メルクーリ自身も切望し、そしてギリシャ国民も願っていた博物館が、遂に2009年6月、アテネのアクロポリス南麓に竣工、オープンした。「新アクロポリス博物館」(以下、アクロポリス博物館と呼称)である。「新」というのであれば、旧館があったのかとの疑問が湧くのは当然であるが、実は、旧アクロポリス博物館は、長年アクロポリスの丘上に設置・運用されてはいたが、何より手狭であった。しかし、新たに竣工した博物館は、旧館の10倍ともなる展示スペースを有している(図ー8)。

一方、地下の基礎部分の発掘時には、新石器時代の終り(紀元前3000年頃)から紀元後6世紀頃に至る様々な時代の住居群、道路、貯水槽が発見され、また各種壺、調理器具、香油ランプ等も出土した。また、まさにその場所を基礎として建設された新博物館では、エントランス前のテラスおよび館内グランドフロアの床に強化ガラス



博物館東側の外観（Acropolis Museum提供）

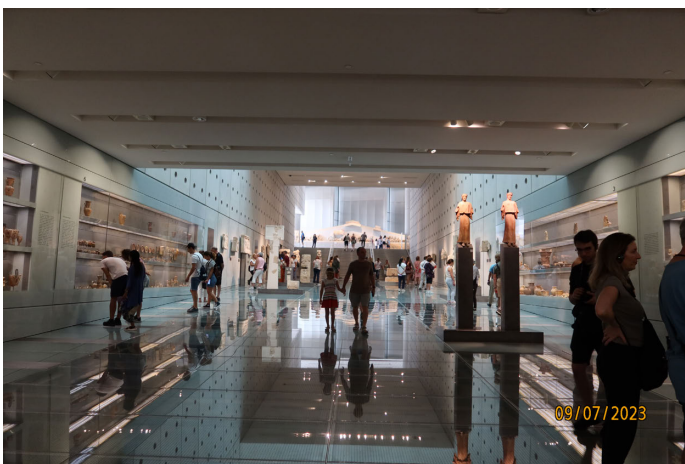


エントランス外観（TO BHMA, Aug. 16, 2024）

図－ 8）アクロポリス博物館



図－ 9）アクロポリス博物館のエントランスと、基礎部で発掘された遺跡（筆者撮影）



図－ 10）アクロポリス博物館の地上階展示場：床には強化ガラスが敷かれ、地下遺構も見下ろせる。緩やかなスロープで一階へと登っていく。（筆者撮影）

を敷き、地下の遺構が見下ろせる仕組みを取り入れている。実に、世界的にも稀有の博物館である。現在は、地下の遺構部分には見学路も整備されている（図－ 9）⁽¹³⁾。

③ アクロポリス博物館のコンセプト

アクロポリス博物館は、地階の遺跡部分を除き、建物自体はグランドフロア（＝地上階、日本で言う 1 階）、1 階、2 階、3 階という 4 階構造となっている。そして各階の展示フロアには明確なコンセプトが盛り込まれている。図－ 10 はそのグランドフロアであるが、その床はゆるやかな登りのスロープとなっており、その奥が階段で 1 階（日本で言う 2 階）へと繋がっている。さらにスロープの左右には、これまでアクロポリス周辺の発掘調査において出土した遺物が整然と展示されている。すなわち、2400 年前のアクロポリスのパルテノン神殿



パルテノン神殿のメトープ
(ドーリス式柱上の浮彫額)

左右写真：アクロポリス博物館提供

パルテノン神殿の内室と
外室を分けた内壁のレリーフ



図－11) 展示ホール3階：パルテノン・ギャラリー

を目指して参道を登りつつ、その周囲で見られたはずの光景を再現するという、明確なコンセプトが込められている。そして最上階となる3階フロアは、パルテノン・ギャラリーと銘打たれ、アクロポリスの丘を登り切った眼前に、パルテノン神殿が現れるというストーリーのクライマックスを迎えるのである⁽¹⁴⁾。換言すれば、2400年前の参詣ストーリー、その歴史を、まさに「母国の同じ空間」で可視化し、「見られる歴史」に変換している努力は、長きにわたるギリシャ国民の悲願の結実とも読み取れる。言わば、可能な限り地域文化の真正性を担保するような博物館と位置付けられている。

④ パルテノン・ギャラリーが語り掛ける言（ことば）

そして、最上階のパルテノン・ギャラリーには、実物のパルテノン神殿と全く同じ方向を向き、同じ数の柱、同じサイズにつくられた「神殿」が再現されている（図－11）。先述の通り、往時パルテノン神殿のエンタブラチュア（フリーズ）が神殿外周の柱の上部を囲っており、その内側には内室と外を隔てる内壁が設置されていた。その内壁の外周もレリーフで装飾されていたが、同様にパルテノン・ギャラリーの「神殿」の内壁外周にも、レリーフがはめ込まれている。しかしながら、それらのレリーフを眺めると、ベージュ色と白色の2色のレリーフが混在していることに気が付く。この区別の理由は、ベージュ色がオリジナル・レリーフで、白色がレプリカであることを来館者にはのめかすための施策である。実は、英国人エルギン卿は、パルテノンのすべてのレリーフを母国に持ち帰ったのではなく、幸い半数以上は残されたままであった。ギリシャ政府および文化省としては、自国の貴重な文化遺産が不当な略奪によって分断されている事実を世界中から訪れる観光客に訴え、パルテノン大理石の返還のため、さらに多くの人々から支援を得たいというのも、その理由の一つである。「見られること」による真正性の回復を目途としている。

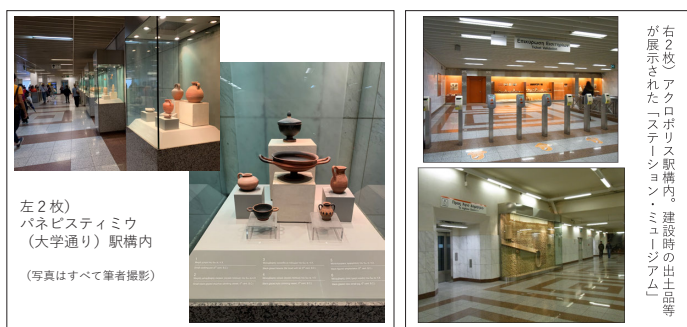
図らずも、2009年6月、同博物館オープニングの記念式典では、当時、ユネスコ事務総長であった松浦晃一郎が来賓の上スピーチを行い、「全てのアクロポリス彫刻群が世界各地の博物館から返還されるように、ユネスコも最大限の努力を払う」と強く明言したことは、実に画期的な出来事となった⁽¹⁵⁾。

また、アクロポリス博物館のオープン以降も、ギリシャ政府、文化省をあげて英国側への返還請求を強めている中、近年、英国国内でも大英博物館の姿勢が根本的に問われ始めている。そして、2022年8月1日のThe Guardianの電子版は、大英博物館の副館長ジョナサン・ウィリアムズ氏が「パルテノン神殿の彫刻についてギリシャとの「パートナーシップ」を提案し、その条件の下でパルテノン神殿の彫刻が200年以上の時を経てアテネに返還される可能性がある」と述べた記事を掲載している。

先述した京都・産寧坂においては、「見られること」によって、地域文化の真正性に変質する危険性が生じていたが、アテネの本事例においては、逆に「見られること」によって、古代ギリシャの貴重な文化遺産の蘇生を実現しようとしている。これは、エリック・コーエンが論じる「創発的真正性」の具体事例と言って、過言ではないだろう。

⑤ メトロ・ステーションに見るアテネの観光まちづくり

一方で、アクロポリス博物館以外で、観光都市アテネの街中では、どのような観光まちづくりの施策がおこなわれているのだろうか。その特徴的な施策の一つが、アテネのメトロ・ステーションの



図ー 12) アテネ市内メトロ・アクロポリス駅など

コンコースに見られる。現在、アテネ市内にはメトロ（地下鉄）が1号線、2号線、3号線と3路線整備されている。1号線は1869年に完成し、ロンドンに次いで世界でも2番目に古い地下鉄とも言われている。2号線と3号線は2000年に完成したが、その工事の際は市内のあちこちで遺跡が発見され、考古学局の調査が入った。そのため、その度に工事の中断が余儀なくされたが、その結果、特に駅建設地周辺で発見された遺跡やその出土品については、駅構内コンコースに展示スペースを創設し、可能な限りそこに展示するという施策が取り入れられた。特に、国会議事堂前のシンタグマ駅の工事現場からは、初期キリスト教時代の巨大な墳墓群が発見され、その出土品等の多くは、現在、アテネの国立考古学博物館やビザンティン・キリスト教博物館に収蔵されているが、遺構と出土品の一部は、同駅コンコースの広々とした空間を利用

して展示されている。誰でも無料で見学が可能となっており、他にも市内中心部のア
クロポリス駅、大学通り駅、モナスティラキ駅など複数の駅コンコースで、同様な展
示を行っている。ヨーロッパには、ローマをはじめ多くの歴史都市が存在するが、こ
のようなエグジビションをおこなっているところは、他に例を見ない（図－12）。

このように、観光客のみならず市民にも「見られること」を通して、日常的に古代
ギリシャ文明の真正性に触れること、地域文化への深い理解を醸成することも期待で
きる、アテネ市の取り組みである。

4－2. サントリーニ島におけるキリスト教会の発展

① サントリーニ島の歴史概要

次にとりあげる2つ
目の事例は、エーゲ海
キクラデス諸島南部に
位置するサントリーニ
島である。伊豆大島よ
りひと回り小さい程度
のこの島は、紀元前
3000年頃エーゲ海で
最古のキクラデス文明
が発祥した地としても
知られるが、紀元前
1500年頃、島中央部
の火山が大爆発を起こ
したため、中央部一帯



図－13) サントリーニ島北部イア地区街並み（筆者撮影）

が陥没し、大規模なカルデラ地形を形成した。その後、中世にはキクラデスの島々にもキリスト教が広く布教され、サントリーニ島内では良質な赤ワインの生産が盛んになったため、地中海諸国各地にキリスト教会の祭儀用赤ワインとして数多く輸出されていた。ちなみに、サントリーニの赤ワインは、その島名にちなんで「ヴィンサント」と呼ばれている。

また、古代から中世、そして近代に至るまで、地中海海上交通の要衝であった。20世紀のはじめには地中海でも帆船が蒸気船にその役目を譲り渡したが、それまでサントリーニは数千年もの間、地中海海上ルートにおける重要拠点として、その名を馳せてきた。よって、この島には多数の船主がそのベースを置き、船員の家族も多く居住していた。特に、低賃金の船員たちは、本土から建築資材を調達して住居を建てるとなれば、高額なコストとなるため、カルデラの壁面に横穴を掘って洞窟住居を築いた。

さらに、その開口部にはドーム型のエントランスを付け足し、その壁面を白い石灰塗料で塗装した。結果、そのような洞窟住居がカルデラに無数につくられることを通して、赤茶けたカルデラの壁面に白いドーム型の家々が建ち並ぶ唯一無二の景観を形成するようになった。

一方、蒸気船の普及により、商船がサントリーニに寄港する必要性も著しく減少したことから、次第に、サントリーニは地中海海上交通の拠点としての役割を喪失していった。加えて、1928年と1956年には同島を大地震が襲い、この地震を機に多くの住民が離島し、急速な過疎化が進んだことから、島の集落はほとんど廃墟と化した。しかし、1975年以降には、島北部のイア地区において、カルデラの壁面に連なる洞窟住居群の特異な景観が潜在的な価値と評され、ギリシャ観光省ギリシャ政府観光局による国を挙げた「伝統的集落再生・観光地化プロジェクト」が始動した。1980年までには60棟の洞窟住居が再生され、ゲストハウスなどの観光施設として蘇った。このプロジェクトを引き金に、その後民間事業者による洞窟住居やキャプテンハウス（往時の船主の大邸宅）の再生・観光施設への転用が加速し、2000年を迎える頃には、世界的にも屈指のアイランド・リゾート地として人気を博すまでに成長した（図-13）⁽¹⁶⁾。

② サントリーニ島のキリスト教会堂⁽¹⁷⁾

さて、キリスト教会の発展の見地から興味深い点が、教会堂の数とその「私有率」である。サントリーニ島の面積は76km²と小さな島であるが、ギリシャ正教の教会堂が352棟、カトリック教会堂が10棟存在する。この島のスケールでこの教会堂の数は、まず他に例を見ない。

それは信徒による多数の献堂に起因する。前述の通り、歴史的にこの島は地中海海上交通の拠点となってきたが、特に中世以降はこの島の船員たちが、航海中、嵐に遭って生命の危機を経験すること



図-14) 島中部フィラ地区の私有教会堂（ギリシャ正教）。
（筆者撮影）

も度々であった。そのような過酷な環境下で、キリスト教信徒の船員たちは、主に守

護を求めて祈り、且つ「救われた暁には、主に感謝してサントリーニに教会堂を献堂します」と祈念したのであった。そしてその嵐から救われた船員たちはサントリーニに帰島後、祈願した通りに、主への感謝を込めて「教会堂を建造」して、それを主に捧げたという（図－14）。

よって、サントリーニの教会堂のほとんどは私有で、主要観光地イア地区においても、パナギア・プラツァニとアギオス・ゲオルギオスの2つの教会堂のみがギリシャ正教会保有のもので、その他、大小無数の教会堂は私有である。つまり、この島の私有の教会堂は、当然のことながら「人に見られる」ものではなく、「神に見られる」ものであったのは言うまでもない。

ところが、前項でも述べた通り、近年のサントリーニ島内の急速な観光地化により、教会堂の所有者が自身のプロパティをホテルなどの観光施設に転用し、事業を始めるケースが多々見られるようになってきた。そのため、今や「教会堂を有するホテル」も決して珍しくはない。むしろ、再生された高付加価値の小規模宿泊施設は、十分な利益を生み、それを教会堂やホテル施設のメンテナンスにも充当できることから、以前に増して教会堂の美しさを維持可能となる。且つ、ホテル宿泊者も教会堂を見学できることは、代えがたい体験アクティビティにもなり得る。これは、「神に見られるための教会堂」が「人に見られるための教会堂」に転換したとも言えるのである。

③ 旧修道院が高級ホテルに⁽¹⁸⁾

最後に、島内最大の観光地フィラの旧市街に位置する旧ドミニコ会修道院の建物について紹介したい。この修道院は、近年、修道士の数の減少から、その建物を養老院に転用していた。しかしその経営も困難となり、結果、廃屋同然の状況となっていた。しかし、カティキエスという国内のホ



図－15) 修道院をリノベーションした高級ホテル（筆者撮影）

テルグループが、ドミニコ会からこの施設を借り受けて、美しくリノベーションを施し、五つ星の豪華ホテルに再生の上、2019年にオープンさせた。客室は40室と、小規模ホテルがひしめくサントリーニでは、比較的大型のホテルである（図－15）。

当時の修道院内の象徴的な施設も一部残されており、例えば、パティティーリと呼

ばれるブドウ酒づくりの施設もその一つである。プールにも見える槽内に大量のブドウを投じ、足で踏んで果汁をうみ出し、それを発酵させてワインに仕上げていた原始的なワイン作りの施設が、現在も同ホテルの中で見て触れることができるように再生されている。ホテルによると、観光シーズンには定期的にワイン造りのイベントを開催しているとのことである。有形の歴史的文化遺産が「神に見られるもの」から、「人に見られるもの」に再生され、息を吹き返した事例である（図－16）。



図－16) 修道院ホテルの内部。修道院時代の景観が今も残る（筆者撮影）

5. まとめ

本報告においては、①オリンポスの神々の神話そして初期キリスト教発展の舞台でもある「ギリシャ」において、その文化遺産を活かし共存しつつ観光発展に繋げる手法、②ギリシャ国内観光地における「見られること」による地域文化の真正性の変容、とりわけエリック・コーエンが述べた「創発的真正性」に関して、歴史的観光都市アテネと、エーゲ海の珠玉とも呼ばれるサントリーニ島の事例をもとに考察してきた。

アテネの場合は、2400年前のパルテノン神殿への参詣ストーリーを今に再現しているアクロポリス博物館、その歴史とそこに込められたギリシャの悲願が可視化される、言わば「見られる歴史」に変化していったという事実、さらにそれが地域の文化遺産の真正性を再創出していることが伺い知れた。また、メトロ・ステーションの博物館も、歴史との共存、街をあげて地域の歴史文化を可視化している努力は、評価すべきであろう。そして、それらの努力が今や英国国内の世論にも少なからぬ影響を及ぼしていることは、特筆すべきことであろう。

一方、サントリーニ島の教会堂は、元来、人に見られるものではなく、神に見られるものとして建造されたものだが、文化遺産の再生と観光利活用という観点から、人に見られる、触れられるもの、そして観光者にとっても歴史体感が可能な施設へと転換している。例えば、ドミニコ会の修道院が高級宿泊施設に再生されている件については、様々な見方もあるかと承知するが、しかし、廃墟と化していたプロパティが、観光活用により蘇生し、そこで得られる観光収入がひいてはこのような歴史的建造物

を維持する事業にも充当されることは、文化財の持続可能性の点からも、実に重要な施策である。

あらためて、我々も、歴史文化遺産の持続的な維持運営のために、その適切な「活用」を考え直す時であると痛感する。

【謝辞】

2023年9月アテネにて、サントリーニ島のキリスト教会堂に関する聞き取り調査にご協力いただき、詳細な情報提供を賜ったギリシャ人建築家 Paraskevi Bozineki-Didoni 氏に、心より謝意を表したい。

また、2019年9月サントリーニ島フィラにて、ドミニコ会修道院の再生ホテル化について詳しいご説明をいただき、同ホテル内をご案内くださったオーナーファミリーの故 Evaggelia Mendrinou 氏に、心より感謝の意を表したい。

【注】

- (1) 安村克己, 堀野正人他編著 (2011) 『よくわかる観光社会学』, ミネルヴァ書房。
- (2) 外務省公式 HP, ギリシャ共和国基礎データ, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/greece/data.html>, 2024年8月16日閲覧。
- (3) 京都市産業観光局 (2023) 『令和5年 京都観光総合調査』, 京都市。
- (4) 石本東生 (2016) 「京都の観光力を支える「歴史的町並み保存」と観光振興の考察—重伝建地区「産寧坂」における観光ビジネスの展開—」, 『日本国際観光学会論文集』第23号, 日本国際観光学会。
- (5) ディーン・マキアーネル著, 安村克己, 須藤廣他訳 (2012) 『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析—』, 学文社。
- (6) ジョン・アーリ, ヨナス・ラースン著, 加太宏邦訳 (2014) 『観光のまなざし』, 叢書・ユニベルシタス, 法政大学出版局。
- (7) 上掲書, 安村克己, 堀野正人他編著 (2011) 『よくわかる観光社会学』。
- (8) 図-3の出所: MacDonald・Fiona, Bergin・Mark (1998) *Περιπλάνηση σε έναν Αρχαίο Ελληνικό Ναό*, Εκδόσεις Μοντέρνοι Καιροί, Greece。
- (9) 図-4内、右図と中央図の出所: Πανσάνιος (2004) *Πανσανίου Ελλάδος Περιηγήσεις Αττική*, Εκδοτική Αθηνών, Greece。
- (10) 図-5, 6, 7の出所: F・エティエンヌ, R・エティエンヌ著, 青柳正規監修, 松田廸子訳 (1995) 『古代ギリシア発掘史』, 「知の再発見」双書46, 創元社。
- (11) 上掲書, F・エティエンヌ, R・エティエンヌ著, 青柳正規監修, 松田廸子訳 (1995) 『古代ギリシア発掘史』。
- (12) Foundation Melina Mercouri 公式 HP, <https://melinamercourifoundation.com/en/>, 2024年8月16日閲覧。
- (13) The Acropolis Museum 公式 HP, <https://www.theacropolismuseum.gr/en>, 2024年8月16日閲覧。
- (14) 石本東生 (2011) 「ギリシャにおける文化遺産返還運動の成果と観光政策に関する一考察: 世界遺産・文化遺産保全と博物館整備の事例を中心に」, 『日本国際観光学会論文集』第18号,

日本国際観光学会.

- (15) 上掲書, 石本東生 (2011) 「ギリシャにおける文化遺産返還運動の成果と観光政策に関する一考察: 世界遺産・文化遺産保全と博物館整備の事例を中心に」.
- (16) 石本東生, 岡村祐, 江口久美 (2020) 「サントリーニ島イア地区における伝統的集落特別保護令による観光地形成—1993 年大統領令の規定内容と運用実態の分析—」, 『都市計画論文集』第 55 巻第 2 号, 日本都市計画学会.
- (17) 本項の記述内容に関しては、2023 年 9 月 3 日アテネにて、サントリーニ島の教会建築にも詳しいギリシャ人建築家 Paraskevi Bozineki-Didoni 氏に直接聞き取りをおこなった内容が中心となる。
- (18) 本項の記述内容に関しては、2019 年 9 月上旬、サントリーニ島フィラのホテル Katikies Garden Santorini にて、オーナーファミリーの Evaggelia Mendrinou 氏 (故人) に聞き取りを行った内容が中心となる。

写真と社会風景： 『STAGE』『SINGERS & STAGES』『台湾綜芸団』を例に

沈 昭良

(華梵大学写真／VR デザイン学科 教授)

台湾には、綜芸団、歌舞団、康楽隊、そして視覚映像メディア会社などの名で呼ばれるさまざまな演芸興行団体がある。客層と仕事の内容は重複しており、まとめて台湾独特の移動式興行団体と呼ぶことができる。彼らは、1970年代前後から、歌やダンスなどのパフォーマンスを中心に、台湾社会の各種冠婚葬祭の場において活躍してきた。この写真集の被写体であるステージカーは、今でも現役で、台湾の庶民社会に生き続けている。上記のような興行団体の公演の場を提供し、多くの台湾民衆の集合記憶上の移動式「キャリアー」となっている。

あれは2005年末頃であったろうか。「台湾綜芸団」を主とする撮影プロジェクトに集中して取り組むために、ちょうどフィールドワークを始めた頃だった。台湾の総合演芸団が公演を行う「キャリアー」としてのステージカーに遭遇することが、たびたびあった。静寂の農村で、ナイトマーケットの喧噪の傍らで、辺境の漁村で、道ばたの雑踏の中で、はたまた寺のざわめく広間の前で。まるで巨大な台湾版トランスフォーマーのようなこのステージカーに、惹かれる自分がいた。描かれた台湾らしい色彩とトーテム、それらが結びつける生産の知恵と発想、そこに表現された庶民の価値観と記憶、地方精神、地方気質がもたらす影響の深さと広がり、そこから拡張される文化の厚みと広がり。そういったものに、絶え間なく動かされ、私はだんだんと〈STAGE〉(ステージカー)を、独立したもうひとつの作品テーマとして発展させたいと考えるようになった。

初期に興行団が使用していた舞台には、今でも使われているテントと舞台を組み合わせたもののほか、トラックを改造して音響設備を搭載した簡易式の電子オルガン車もあった。最近では時代の変化に合わせ、また経営者や観衆がより良いライティングや音響設備を望んでいることもあって、電子花車(訳注：電飾などの装飾が付いた舞台付きのトラック)や、折りたたみ式の油圧式移動ステージカーなどへと発展してきている。こういった類いのステージカーの開発や製造、メンテナンスに関わっている工場は、最高レベルの知識と技術を具える必要がある。また様々な種類の専門的な

イセンスをそれぞれ申請しなくてはならない。そういったことから、台湾全体でも業界で知られているのは、わずかに、虎尾吉大や北斗長億、嘉義嘉易といったメーカーのみである。ステージカーの発展の歴史を見ると、一見簡単なこれらの研究開発のプロセスが、実際には、材料や動力、機械、電機、工業デザインなど、多くの分野にわたることが分かる。折り畳み収納式も、これら上記のそれぞれの科学が精進して練り上げたものと言えるだろう。初期の純手動の発想から、中期の有線操作へ、そして現在の、数分で舞台装置が開く無線操作技術の完成へ、と発展してきたのである。

その中でも、ステージカーの視覚主体の舞台デザインは、初期には、線描や図形、色の塊などで簡単に蛍光灯を補っただけのシンプルな方法であったのが、時代の流行や、ほとぼしる想像力に従って、東西の内容と形式をカバーするようになった。例えば帆船や竜、あずまや、蝶、馬車、シドニーのオペラハウス、ホワイトハウス、ヨーロッパ式の城塞、自由の女神、スペースシャトル、観覧車、子どもに人気のハローキティやピカチュウなどの具象的トーテムを、ネオン管と組み合わせ、スプレーペインティングで舞台上に描いたのである。このごろの舞台デザインはまた新しい流行に乗って、抽象的トーテムという方向に向かっており、その視覚表現の主体も、新しく鮮やかな技術である LED ライトの光へと変わってきている。ステージカーの開発と発展は、現在進行中で絶え間なく挫折と刷新を繰り返しながら、安定の方向へと向かい、成熟してきていると言ってよい。

ステージカーの歴史と文脈を振り返ってみると、清代の「蜈蚣閣」や日本統治時代の「芸閣」など、女性が籠に担がれて街を行き来する民衆の活動に、その源流を求めることができる。ただし、移動式ステージカーの進化にのみ注目し、関連の研究報告や筆者のフィールドワークの結果も合わせて考えるならば、以下のように分類することができる。葬儀専門の女性コーラスを電子オルガンと結びつけ、素朴な色の花で周りに装飾を施した花カゴ車（1975 年）、葬儀がもたらす包み隠されたような印象を避けるために、その花カゴ車を簡易なネオン管やプラスチックの造花で飾った電子オルガン車（1977-78 年）、目の覚めるように美しい装飾が機動性を高めると同時に舞台の形式と音響やライティングの効果を備えるようになった電子花車（1980 年代から現在まで）。そして、電子花車が葬儀と慶事を兼用していることと効果的に区別するために、より効率が良くプロらしい舞台効果を研究開発してできた油圧式移動ステージカー（1990 年代初期から現在まで）がある。これら四種のステージカーの、年代や異なる需要に基づいた鍵となる変化は、お互いに密接に結びついている。

台湾にはいったい何台のステージカーがあるのだろうか。精確な統計は無いが、実際に営業しているのはおそらく 600 台に上るのではないかと思われる。雲林や嘉義、

台南地区に特に多い。これらの地区には寺が多く、寺と結びついて頻繁に祭りが行われるからである。住民はみな敬虔かつ熱心で、神への感謝をあらわす宗教活動となると、一生懸命である。慶事の場合は、戸外にテーブルを並べて客をもてなす習慣（辦桌）があることとも、この地区でステージカーが特に発展したものと密接な関わりがあるだろう。時代の変化に伴って、ステージカーの利用方法は、しだいに街頭での活動や選挙運動にまで広がり、多様性を見せはじめている。料金は主に時間で計算し、レートは場所や車の大きさや使用年数によって異なる。借り主は一般民衆や企業や商店、或いは同業者同士で調整するようになっている。ステージカーの主は、顧客の要望に応えなくてはならないだけではない。指定された時間に指定された場所で舞台を広げ、約束の時間内に活動を行う。事前に舞台の準備を済ませ、演目が終わると片付け、公演中はずっと音響やライトの操作を受け持つことになる。

ステージカー上の公演内容は、初期には歌って踊るパフォーマンスが主なものであった。その頃の芸人たちの衣装やスタイルは、どちらかというと、屋内でのショーの華麗な服装と似通っていた。近年では、セパレート式の衣装が主流であり、中にビキニを着るスタイルが一般的となっている。演芸興行団の公演内容も、派手で顧客のニーズを満足させるものであり、絶えず新しい演目が加わる。タレントや歌手による歌と踊りのほか、借り主の予算に合わせてこれに、ポールダンスやアクロバット、手品、民俗芸能、ボディビルショー、芸人が異性に扮してのショーや、ビッグバンドによる演奏などが加わる。

芸人には、プロもいれば、セミプロもいる。芸に身を投じる理由も、それぞれだ。一般的には、家計を助けるためではなく、練習するうちに芸に秀でるようになったとか、演じるのが好きだとかいうような理由が多い。あるいは家族が長らく関連の仕事をしているために、この世界に足を踏み入れたという者もいる。芸人たちの仕事のやり方には、時間刻みで多くの会場を回る形が多く、約束した時間内に、近くの村々に舞台を出しているいくつかのステージカーを、順番に回る。ぎりぎりになって頼まれても二つ返事でさっと動けること、次々に仕事をこなせることが望まれる。

芸人には歌手が多く、台湾各地にあまねく分布している。私のフィールドワークからわかったのは、プロの歌手以外にも、学生や英語教師、銀行職員などが、少なからず活動していることである。彼らは仕事が休みの日に、兼職という形で、ステージに立つ。旅回りの歌手を至近距離で観察していると、彼らのような芸人が、きらびやかな外見の裏で、実は非常に平凡で素朴な素顔を持っていることに、驚きを禁じ得ない。長らく報道の影響で形作られてきた一面的な理解やネガティブな描写とくらべると、

その落差はきわめて大きい。フリーの歌手の場合、やはり若い女性であるほうが、業者に人気がある。年上の歌手は、通常、司会者や経営者に転身することはなく、結婚後、この仕事を辞めて、別の仕事を探すこととなる。

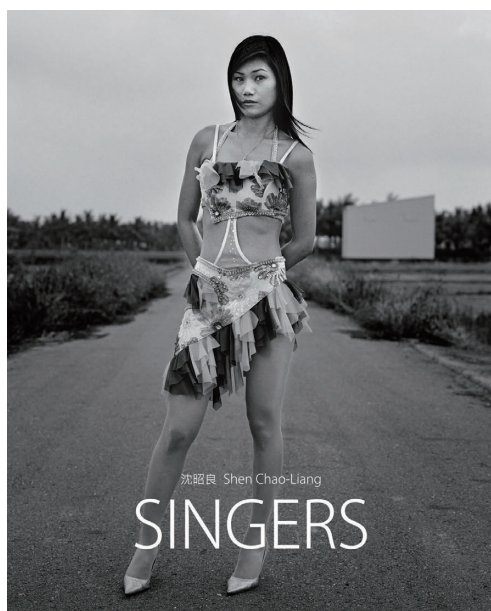
この数年、ステジカーが舞台を出す町や村の土地に降り立つたびに、レンズの前の幻影的な現実だけではなく、いつも私の心を動かすことがもうひとつあった。それは、おそらく自分は、〈STAGE〉（ステジカー）シリーズの撮影のためでなければ、この場所には来ていなかったであろうし、また、訪問のプロセスの中で、都会とは違う田舎の人たちの気質について知ることもしなかっただろう、ということである。現場が辺鄙な郊外の野原にあたり、また夕方の暗くなりかけた色のせいで道が分かりにくかったりして、何度もあちこち探しまわったこともある。挫折感を味わいながら、夕暮れの中で水田に映り込んだ景色を頼りに進むしかなくなり、曲がりくねった村の間の小道を、焦りつつ、急いで駆け抜けたこともあった。あれから何年も経ったいま、出かけた場所や、撮影地点の移動ルートについては、はっきりとは思い出せない。ただ、鳳山の道路傍であろうが、台中の工場であろうが、新竹の寺の祭りであろうが、通霄の港周辺であろうが、苑裡の田圃であろうが、虎尾の家々のあいだにめぐらされた小道であろうが、嘉義の家々の庭であろうが、台北の野菜市場であろうが、富里の山林であろうが、どんな現場においてもそれらの幻影の中に静寂が漂っていたさまは、今でも昨日のこのように憶えている。

〈STAGE〉（ステジカー）シリーズを通して、視覚芸術の制作上でのドキュメンタリー写真の新しい表現を模索し、同時に台湾における現代写真の制作というものを体現したいという思いがあった。過去の、さまざまな抽象概念や、複合メディア、デジタル合成技術に焦点を合わせた表現に、疲労感を感じていた。そんなわけで、私は次第に、大型カメラを使うようになった。直接カメラに収める方法を取ることで、その瞬間の現実の文化社会の景況に対し、演繹的に深度を増すような作品を制作しようと考えたのだ。被写体の持つ条件と特質について考えをめぐらし、同時にステジカーと写実的環境とのあいだに生じる、色とトーテム、照明と全体の雰囲気結びついてそこに蔓延する超現実的状态、そして現場を覆っている幻想的でにぎやかな様子を視覚的に忠実に再現するために、ステジカーの撮影のタイミングを一律に日没の前後に設定し、4×5判のカラーポジフィルムで撮影を行ったのである。

〈STAGE〉（ステジカー）作品シリーズのほとんどが、誰もいないステージと周りの環境を配置した表現形式を取っている。これは、ステジカーの存在が、庶民社会の中で突出した存在である現状と、多様なそれぞれの現実の場所と場所とのあいだ

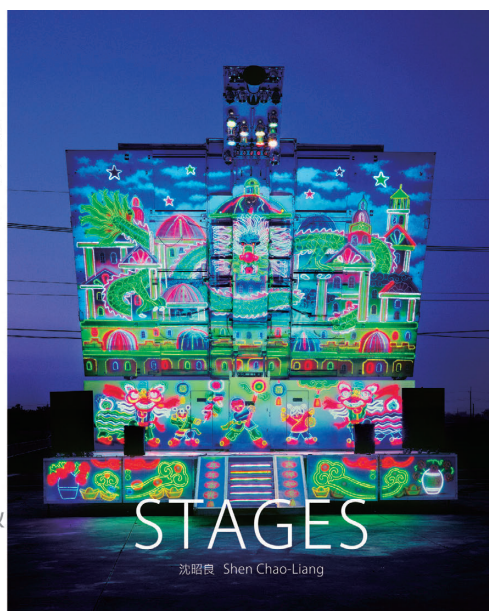
に、はっきりと明示できない対比があることを示している。また、視覚表現と様式の上で、伝統的な写真ドキュメンタリーの様式とは異なる、環境肖像との融合に向かうような、視覚的にグループ化し、タイプ別に分類する現代的表現方法を取っている。しかし、〈STAGE〉（ステージカー）シリーズの実景の撮影は、主観と客観の要素が実にごちゃごちゃと入り乱れ、その実務の難易度は、私の何年にもわたるフィールドワークと撮影実務の経験においても、一二を争うものであった。絶え間なく現場に通う必要があるだけではない。台湾全域に分布するステージカーをたずねるために、業者に連絡してコーディネートを行い、適当な撮影場所をロケハンして歩き、同時に、公演内容のタイプや、撮影地点、季節や気候、日没時間、住民の観賞習慣や生活リズムなどを斟酌しなければならない。そうやって、2006年から2023年までのあいだに、おおよそ130部前後の撮影を行ったのである。

今回の報告は、2006年から2016年にかけて撮影した『STAGE』、『Singers & Stages』、『台湾綜芸団』の三つの作品シリーズから、美学表現、歴史、文化、宗教などとの繋がりにもとづいて写真を選び、全体像が見えるように編集したものである。この産業の独特さ、そこに含まれる豊かな文化的情報、駆け巡るアイデア、まばゆく華麗なトーテム……。これらは大衆に働きかけ、独特な産業であり娯楽文化であるものに、時間的な広がりを持たせ、かつ空間的な、つまり、縦、横、平面、及び立体的な枠組みを織り込み、人々の想像を促している。撮影に際しては、ほとんど伝統的とも言える直接的な撮影方法を用いることによって現代的な芸術語彙を混ぜ込み、台湾のいまを伝える社会文化の景況に焦点を合わせて、これを視覚的に描写することを試みた。



沈昭良 Shen Chao-Liang

SINGERS & STAGES



写真集《SINGERS & STAGES》(2013) 表紙



SINGERS & STAGES 系列 - 高雅 |
SINGER Kao Ya、台南 台湾 | Tainan
Country, Taiwan、2008 年筆者撮影



SINGERS & STAGES 系列 -
STAGE#69 雲林 台湾 | Yunlin
Country, Taiwan、2008 年筆者撮影



写真集《STAGE 摄影集》(2011) 表紙



STAGE#14 Lightjet C Print 苗栗 台湾 | Miaoli Country, Taiwan、2010 年筆者撮影



STAGE#68 Lightjet C Print 台南 台灣 | Tainan Country,Tiwan、2008 年筆者攝影



STAGE#97 Lightjet C Print 台中 台灣 | Taichung Country,Taiwan、2011 年筆者攝影



STAGE#99 Lightjet C Print 嘉義 台灣 | Chiayi Country,Taiwan、2009 年筆者攝影



STAGE#120



写真集《台灣綜藝團 攝影集》（2016）表紙



新北 台湾 | New Taipei City, Taiwan、2006 年筆者撮影



台北 台湾 | Taipei, Taiwan、2005 年筆者撮影



新北 台湾 | New Taipei City, Taiwan、2010 年筆者撮影



雲林 台灣 | Yunlin Taiwan、2013 年筆者攝影



嘉義 台灣 | Jiayi, Taiwan、2008 年筆者攝影



嘉義 台湾 | Jiayi,Taiwan、2008 年筆者撮影



筆者（沈昭良（シン・ショウリョウ）氏）写真

共生の物語をつむぎなおす —ポーランドに出現した 2.5 次元のユダヤ人街—

加藤 久子
(大和大学社会学部 教授)

ポーランド南部にクラクフという都市がある。1596 年まで王座が置かれたヴァヴェル城や、カトリック教会がひしめきあうように建ち並ぶ旧市街【図 1】は 1978 年にユネスコ世界遺産に登録されており、1989 年の東欧の民主化、2004 年の EU 加盟を経て、国際観光客にも人気の観光都市となっている。またクラクフは、第 264 代教皇ヨハネ・パウロ 2 世ゆかりの地でもある。教皇の出生地はクラクフ近郊の小都市ヴァド



図 1 旧市街広場。写真中央は聖マリア教会
(筆者撮影、2014 年)

ヴィツェであるが、大学進学以来、かなりの年月をクラクフで過ごし、教皇に選出された際にはクラクフ大司教を務めていた。ポーランドでは、「教会離れ」が進んでいるとされる今日のヨーロッパでは異例の水準の高い教会出席率がみられるが、クラクフを中心とする南部の都市では、特に実践的な信仰形態をみることができる。クラクフは、いわば「カトリックの都」と言ってよいだろう。

1. カトリックの都のユダヤ人街 —カジミエシュ小史

このクラクフという都市の中に「ユダヤ人街」と呼ばれる地区がある。それがカジミエシュである。クラクフとカジミエシュは、今は地続きで徒歩でも移動可能であるが、中世には川を挟んだ北側と南側に位置する「双子の都市」であった【図 2】。現在のカジミエシュは、ユダヤ文化を見学、体験できる「エキゾチックな」観光地として賑わいを見せる。レム・シナゴグの周辺には 19 世紀風の看板がかかる小商店が立ち並び、壮麗なテンペル・シナゴグでは世界的に著名なユダヤ系音楽家のコンサー

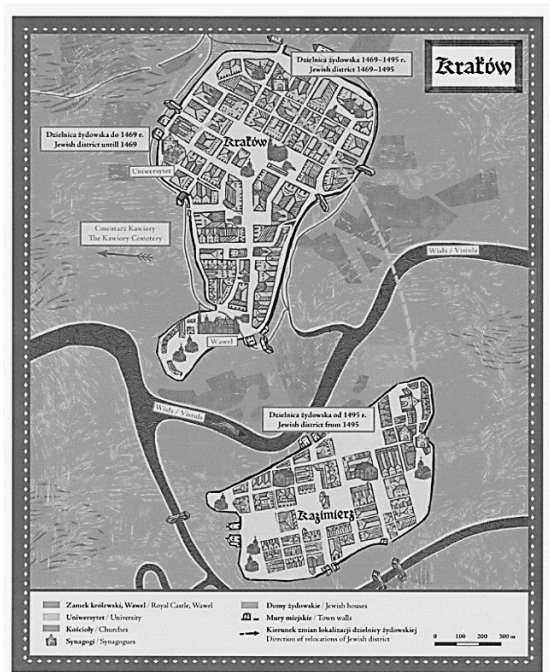


図2 中世のクラクフ(北)とカジミエシュ(南)
POLIN : 1000 Year History of Polish
Jews, p.78

人が知るところであろう。追放されたユダヤ人の多くは徒歩で周辺地域に逃れ、あるいは船に乗って地中海沿岸の商業都市に拠点を築き、やがて河川を遡上し、ローマ帝国全土の大都市に居住地を拡大していった。4世紀にキリスト教がローマ帝国の国教と定められた後にも、数百年の間、民衆レベルではキリスト教とユダヤ教は未分化の状態であり、相互に祭りの祝宴や婚礼などに招待し合い、雇用関係や通婚なども見られたと言われている(ポリアコフ、2004)。しかし、8世紀頃から始まったイベリア半島に侵出してきたイスラム教徒との戦い(国土回復運動)や、11世紀末にローマ教皇によって呼びかけられ、その後200年もの間続いたエルサレム遠征(十字軍運動)などにより、様相は一変する。キリスト教徒の一体感が謳われるのと同時に、異教徒に対する武力行使や略奪は当然視される風潮の中で、ユダヤ教徒はヨーロッパの「内なる敵」とされるようになり(ポリアコフ、前掲書)、ヨーロッパ各地でユダヤ教徒に対する襲撃事件が起きるようになる。治安悪化を恐れた各地の統治者は自らの統治する領土からの「ユダヤ人(ユダヤ教徒)追放令」を出し、西欧各地でユダヤ人は追放(イベリア半島などではキリスト教への改宗も認められた)を強いられることとなった。

これらのユダヤ人を誘致したのがポーランドなど東欧各地の王であった。特にポー

トが開かれている。スタラ・シナゴーク前の広場にはユダヤ料理のレストラン(プティックホテル)が軒を連ね、夜にはクレズマー音楽の生演奏が鳴り響く。この広場では、毎年6月にユダヤ・フェスティバルの終幕コンサートが開催されるのが通例となっており、ハシッド(敬虔派)の輪踊りの熱狂に観光客も身をゆだねる。

しかし、なぜこの東欧の地に「ユダヤ人街」が存在しているのだろうか。ソロモン王、ダヴィデ王の時代に栄華を誇ったユダヤ人は、紀元前後にローマ帝国の支配を受けようになり、これに対する2度の大反乱(民衆戦争)を経てエルサレムを追放され、離散民(ディアスポラ)となったことは多くの

ランド国王には、当時は未発達であった商業（交易）や鉱工業をユダヤ人に任せる目論見があったとされる。なお、カジミェシュという地名も、1334年に「ユダヤ人の自由に関する一般憲章（カリシュの法令）」によって認められたユダヤ人の法的権利をポーランド全土に拡大したカジミェシュ大王の名にちなんだものである。ポーランド王国（ポーランド＝リトアニア共和国）は、近世にはオスマン帝国に次ぐ広大な面積を統治するヨーロッパの超大国へと成長する。ポーランド＝リトアニア共和国は東西キリスト教世界の境界に位置したことから、カトリックと正教をはじめ、プロテスタント諸教派やアルメニア使徒教会、イスラム教など、多民族・多宗教が共存する場となったが、特にユダヤ教徒は共和国人口の1割を占め、世界のユダヤ教徒の半数が共和国に居住する状況であった。それは、ポーランドが周辺の三大国に分割占領され、地図上からは姿を消す18世紀末まで続いた。

19世紀のヨーロッパはユダヤ人にとって、決して居心地の良い場所ではなかった。国民国家の勃興と、ナショナリズムの高揚の中で、ユダヤ人は次第にヨーロッパに居場所そのものを失っていった。プロイセン／ドイツによる占領地域では厳格な同化政策が敷かれ、ロシア帝国による占領地域では、ユダヤ人に不利な政策が繰り返し導入され、ユダヤ人側が反抗するとみれば苛烈な pogrom（暴力）が繰り返された。それには皇帝による扇動もあったとされている（野村真理、2016）。おびたしい人々が「自由の国」アメリカへの移住をめざし、またイスラエル建国を夢見てパレスチナに移住する（シオニスト運動）若者たちもこの時期に現れた。またその後、圧倒的多数のユダヤ人が居住するポーランドは、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害の主な舞台となった。戦間期のポーランドにおいてユダヤ教徒人口は300万であったが、1946年上半期にポーランド・ユダヤ人中央委員会に登録された人口は24万人である（Leszek Olejnik, 2003）。さらにこのわずかなユダヤ人コミュニティも、1967年の第三次中東戦争を受けてのポーランド・イスラエルの国交断絶と、それに伴うポーランドでのユダヤ人追放（公職追放とパスポートの付与）により、ほぼ完全に崩壊した。カジミェシュの町並みの荒廃は進み、筆者がクラクフに留学した2000年代前半においても、「貧民窟」であるとか、麻薬の売買などが行われていて治安が悪いため接近しないように筆者に忠告するポーランド人も多かった。実際には、多くの大学生が家賃の安いカジミェシュ地区のアパートに下宿していたし、シナゴグやユダヤ文化センター等では国際的に有名なユダヤ系の演奏家や学者によるコンサートや講演会が定期的で開催されていた。そもそもクラクフの国立公文書館現代史分館はカジミェシュにあったので、筆者が接近しないわけにはいかなかった。ただし、当時は崩壊寸前の壁や板戸で釘付けされた老朽化した建物などを目にするのも少なくなく、事実無根の風評というよりは、タイムラグのある情報であったものと理解している。

2. 国際ツーリズムの文脈でのユダヤ文化の復元

さて、ではこの荒廃からの復興はどのように行われたのだろうか。そこには2つの転機があったと考えられる。

戦後のポーランドはソ連の影響圏に入ることを余儀なくされ、西側諸国の観光客が自由にポーランドを訪問できる状態ではなかった（ただし、ポーランドは他のソ連・東欧諸国に比べれば社会統制が比較的緩やかで、親戚訪問を理由とする国際移動を制限しない時期が長かった）。一般の観光客がポーランドを訪問できるようになったのは、1989年の「民主化」以降である。ユダヤ人については、1990年にポーランドとイスラエルの国交が回復して以来、アウシュヴィッツに代表される強制収容所の跡地を対象とした団体旅行（学生、兵士）が行われるようになり、また自らのルーツとしての「父祖の地」を訪ねるスタディ・ツアーが北米や欧州各地で企画されるようになった。クラクフはアウシュヴィッツまでバスで1時間半程度の場所に位置し、世界遺産の街として観光資源もあり、観光施設が整備されていることから、これら国際観光客のアウシュヴィッツへの中継地となった。アウシュヴィッツ収容所博物館の入館者については、1989年に70万人近くに上昇したのを除けば、1980年代、90年代を通じた年間入館者数は50万人台の年が多い。それよりも大きなインパクトとなったのは2004年のEU加盟に伴うシェンゲン協定署名（2004年、施行は2007年）である。2004年以降、年間入館者数は急激に上昇を続け、2007年には120万人に到達し、2016年には200万人台となった（アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所博物館発表）。

これに拍車をかけたのは1993～94年にかけて全世界で公開されたスティーブン・スピルバーグ監督の映画『シンドラのリスト』である。カジミェシュやアウシュヴィッツ収容所付近でロケが行われたことから、カジミェシュのユダヤ文化はフィルム・ツーリズムの対象にもなっていた。このことは、カジミェシュについての理解にさまざまな誤認を生じさせることとなった。ロケ地と歴史上の出来事がおきた場所の齟齬などトリビアルなものは割愛し、カジミェシュの位置づけにかかわる重大なものを以下、指摘したい。

実は、歴史や現実の宗教分布に即して言えば、カジミェシュは「ユダヤ人街」ではないのである。図中の色が濃い大きな建造物はカトリック教会であり、6つの大きな教会が点在していることがわかる【図3】。ユダヤ教徒の住居が集中しているのは枠線の内側のみで、その他はキリスト教徒の住居であった。すなわち、カジミェシュがユダヤ人地区なのではなく、カジミェシュの内側にその面積の2割程度を占めるユダヤ人地区があったというのが正しい理解となる。カジミェシュは15世紀から第二次世界大戦までの長きにわたり、キリスト教徒とユダヤ教徒が共存してきた町だったの

である。

さらに言えば、カジミェシュのキリスト教徒地区にはスカウカと呼ばれるカトリックの巡礼地があり、王の暴政をいさめた司教の聖スタニスワフが残酷な方法で処刑された殉教地として知られている（スカウカの教会には、国民的な作家や作曲家などの棺を納めた墓所があり、昨今では聖スタニスワフから聖ヨハネ・パウロ2世まで、ポーランドの聖人のモニュメント

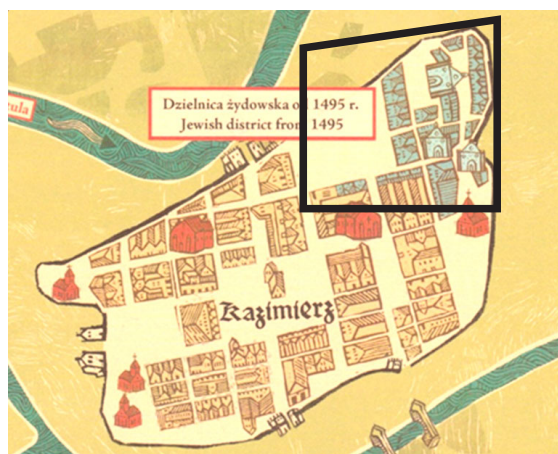


図3 カジミェシュの拡大図（図2より）

が林立する広場が作られるなど、愛国主義カトリックの聖地ともなっている）。しかし、ごくわずかのクラシック音楽ファンを除けば、この場所を積極的に訪れたいという国際ツーリストはいないだろう。ゴシック様式のひたすら巨大な教会堂は、特に芸術的な感興を催すものではなく、聖スタニスワフを称えるパレードなどは（正装の司教たちにスタニスワフの板絵を担いだ民族衣装の信徒が連なり、華やかで「フォトジェニック」ではあるかもしれないが）ポーランド史の文脈が強すぎて、国際ツーリストの興味をひくような物語を提示することはできない。

このような中で、知名度が極めて高い「アウシュヴィッツ」や『シンドラーのリスト』が国際ツーリストをカジミェシュに集客し、集客につながるユダヤ文化関連遺産が次々に復元され、さらに新たに博物館やギャラリー、土産物店、ユダヤ料理レストランも開設されている。これらが生み出す「エキゾチック」な文化景観が、ユダヤ文化やホロコーストについての強い関心を持たない観光客も集客し、「ユダヤ人街」をそこに実在させるという事態に至っているというのがここまでの話である。

3. ユダヤ文化関連遺産の復元

さて、当事者がほぼいなくなったポーランド社会において、ユダヤ人の歴史や記憶はどのように提示されているのだろうか。戦時中に多くの建造物、物品、史料が紛失・焼失した中で、何をどのように見せることができるのだろうか。ここでは、いくつかの類型を示したい。

* シナゴーグの復元と博物館化

比較的オーソドクスな手法として、戦中戦後に破壊されたり、倉庫等に転用された

りしたシナゴークを修復・復元し、ユダヤ博物館として公開する手法がある。廃屋同然となっていたのが1980年代の復元プロジェクトで壮麗な姿を取り戻したポーランド南東部の地方都市ワイントのシナゴークはつとに有名である。カジミェシュで1939年までユダヤ共同体の宗教、行政、文化の中心的機能を果たしていたスタラ・シナゴーク（15世紀創建）も、終戦直後には屋根も崩落して壁しか残っていなかったのが、1950年代に早々に再建され、クラクフ市歴史博物館の分館として公開された。外観や壁龕、中央部にあるビーマー（演壇）なども修復され、一部、復元される前の壁をみせる展示もある。トラーのほか、18世紀後半～19世紀初頭にポーランドや周辺国で製作された銀製の指示棒、燭台、食器、香炉、タペストリーなどの布製品がガラスのショーケースの中に展示されている。

カジミェシュではスタラ・シナゴークを含む7つのシナゴークが文化遺産として保存されている。観光客がよく訪れるのは、スタラ・シナゴークの傍らにあり墓地を有するレム・シナゴーク（16世紀創建）や、第二次世界大戦中、対岸のポドグジェ地区に建設された戦時ゲットーへの移動を強制され、カジミェシュのユダヤ共同体が破壊された歴史・経験について展示されているイザク・シナゴーク（17世紀創建）であるが、戦後の修復を経て青少年文化センターに転用され、現在では書店になっているボパー・シナゴーク（17世紀創建）や、よくコンサートが開かれる豪華絢爛な装飾のテンベル・シナゴーク（19世紀創建）は、地元住民やクラクフの学生・文化人になじみの場所となっている。

1990年代以降は、破壊されたシナゴークの跡地に、破壊された建造物の一部をそのまま展示したり（キューポラの骨組みだけを展示したビャウイストクの大シナゴーク跡）、解説パネルを設置したり（オシフィエンチムの大シナゴーク跡）など、建造物を復元しない（破壊の歴史を伝える）展示例も目立ってきている。

***ホロコーストに特化した博物館**

ポーランド各地に残る労働収容所や強制絶滅収容所の跡地などは、多くが博物館として保全・公開されている。終戦直後に国立博物館に指定されたアウシュヴィッツ＝ビルケナウやマイダネクなどの博物館が有名であるが、1990年以降にアメリカの財団等の支援を受け、急速に調査・整備が進められた東部の絶滅収容所（トレ布林カ、ベウジェツ、ソビブルなど）にも、イスラエルからの修学旅行生がバスを連ねて見学に訪れるようになっている。これらの博物館では「宗教文化」を伝える展示はごく小規模にとどまる。収容所に連行されたユダヤ人がトランクに入れていた、祝日を祝うための燭台や食器、布製品などが一部、展示されているのみである。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所博物館のザウナ館のように、遺品として残された戦前の家族写真などが展示され、在りし日のユダヤ共同体を偲ぶよすがとなっているものもある。

*ユダヤ文化センターとして

各地でシナゴークが復元されるのに伴い、ユダヤ文化センターが付設されるケースも増えてきている。学術講演やコンサート、子供向けや一般愛好者向けの文字、料理、造形・美術などのワークショップが行われ、モノの展示ではなく、体験（コト）や場を共有することによって記憶を喚起し、ネットワークを構築する試みであると言える。

カジミェシュのガリツィア博物館は、2004年に設立された新しい博物館である。写真家のクリス・シュヴァルツがイギリス人研究者の協力を得ながら、ガリツィア地方のユダヤ教関連遺産の「現在」の写真を撮影して回り、それを展示する場として開設された経緯から、英米の財団からの支援を得ており、多くの活動が英ポ二言語で行われている。また、その特性を活かして、外国からの学生インターンの受け入れや展示セットの海外への貸し出しにも熱心である。レンガがむき出しになった廃工場のような空間は最新のアート空間のようで、おしゃれなカフェや土産物も扱うミュージアムショップも併設されているが、ショップ（書籍部）の選書の水準は極めて高い。

2010年からは、カジミェシュで育ったポーランド人で、観光業に従事していた英語の堪能な若者たちのグループが博物館の運営を引き継ぎ、ヤクブ・ノヴァコフスキが館長に就任した。

* 2.5 次元の博物館（小説・映画を基に歴史を再構成して提示）

「2.5 次元」とは、漫画、アニメやゲームを原作にした演劇、ミュージカルなどを指すスラングである。かつては宝塚歌劇団など、資本と固定ファン層を持つ劇団が中心に行っていた手法であるが、1990年代頃から新人アイドルグループの売り出し戦略として定着し、『セーラームーン』『プリキュア』『刀剣乱舞』など、ロングセラーになる作品も出てきている。さて、これを博物館に置き換えるとどうなるだろうか。

ここで取り上げたいのは、「オスカー・シンドラーの工場—エマリア」博物館である。シンドラーの工場は戦後、国庫に没収され、電信電話局として利用されていたが、2005年にクラクフ市に譲渡され、2007年から博物館として公開された。いわゆるよくある体験型博物館であるが、見学していると、自分がどこから（どのような視座から）展示を見ているのかわからなくなるような、主体のゆらぎを感じる。

展示はまず戦前のクラクフから始まる。当時のクラクフの町並みがスライドショーやアクリルパネルで再現され、路面電車に乗り込むと車窓から新聞売りの少年が微笑みかけてくる。これらの写真の取捨選択にも当然バイアスがあると考えられるが、これらの「史資料」に交じって、『シンドラーのリスト』で主人公が通っていた床屋や、ユダヤ人従業員が住んでいた部屋（台所）など、いわばロケセットが再現されている部屋もある。史資料と映画の世界観が入り混じる不思議な空間である。

ナチスの侵攻以降は、映画に依拠しつつ、鉤十字の旗やゲッターの壁、収容所のジ

オラマなど、アイコン的な展示を中心に、ポーランド人を含むクラクフの知識人の戦争体験を描いた他の映像作品（フィクション）の一場面や、子どもの玩具（人形）などを使った、もはや典拠がどこにあるのか不明な展示も増えてくる。もちろん、ユダヤ教の祝日に用いられた燭台、皿などの銀器など、オリジナルの品も展示されているが、基本的には、作品世界をいかに博物館の中に再現するかという点に終始しており、そういう意味で「2.5次元」作品の性質を強く持つ博物館であると言える。

展示の後半は、シンドラーの人物像やシンドラーに助けられたユダヤ人の語りにフォーカスした展示に移行し、シンドラーに関する証言映像が集められた映写室や、助かったユダヤ人らの名前やメッセージを刻んだオブジェのような展示も目立つようになる。

4. 見られることで見えなくなったもの／見られることで見えてきたもの

現代ポーランドにおけるユダヤ博物館の幾つかの展示パターンを見てきたが、カジミエシュに関しては、観光客に見られることで見えなくなったものは甚大である。

1つはキリスト教徒とユダヤ教徒のローカルな共存の歴史・記憶である。カジミエシュのポーランド人たちは、戦時に南に建設されたゲットーに連行されるユダヤ人たちを見ていた。それはオーラルヒストリーに基づき、ホロコーストの記憶を再構成している歴史学者のバルバラ・エンゲルキングらによって「傍観」と結論づけられ（エンゲルキング、2021）、自らの身を守るために、多くのポーランド人は、ユダヤ人に対して何もしなかったとされる。ただ、そこには「目撃者」となったポーランド人のトラウマがあり、沈黙（語りえぬ記憶）がある。共存の歴史の苦さを浮き彫りにする経験であると言える。

もう1つの見えなくなっているものは、ユダヤ人迫害をめぐる過酷な記憶やリアリティである。国際観光客の集客を前提として博物館が次々開館されたことで、これらの博物館は「観光施設」としての役割を果たすことが求められてきた。したがって、残虐な場面などの展示は忌避され、ノスタルジーや「寂寥美」を感じさせるような美的な表現が多くなっている。また、シンドラーに救われたユダヤ人の歴史は普遍的なユダヤ人の歴史と言えるかどうかという点でも疑問が残る。戦前のクラクフのユダヤ人は7万人であったが、ゲットーに「入ることができた（労働に適しているとみなされた）」ユダヤ人は1万5千人程度、シンドラーが救ったユダヤ人は1,200人である。したがって、シンドラーの救ったユダヤ人はゲットーを生き延びたユダヤ人の一類型を示したものとは言えるが、それが叶わなかったクラクフのユダヤ人はあまりにも多い。

さて、では観光を通じて可視化されたものは何だろうか。最もわかりやすい点とし

て、社会主義期に「貧民窟」などと称されていたカジミェシュ地区に外資が投下されることで、シナゴグの復元など、多くのユダヤ関連遺産が再建・建設されたことが挙げられる。ポール・コナトンはパフォーマンスを通じて記憶は保存されると述べたが（コナトン、2011）、毎年恒例のユダヤ文化フェスティバルや文化イベント、追悼式典【図4】や博物館などを訪れることによって、ホロコーストの歴史やユダヤの宗教文化に関心のある層がネットワーク化され、集団として可視化されることには大きな意味があると考えられる。これらの追悼式典に参加しているのはカトリックやユダヤ教の聖職者、大学生らしき若者などが多いが、男女を問わず壮年層、高齢層も観察できる。

もう1つはガリツィア博物館の例である。外国資本がトリガーとなった観光化から、地域の若者が経営に参入し、当初は英語ガイドとして、その後は学芸員、コミュニケーター、経営者として、博物館の運営を担っている状況がある。さらに、ガリツィア博物館の活動もそうであるように、カジミェシュはイスラエルや北米のユダヤ人を結びつけるグローバルなハブとなっていると言うこともできるだろう。「帰国」し、カジミェシュで起業する人も散見される。



図4 クラクフのゲッソーから収容所へユダヤ人が移送された日に行われる「記憶の行進」行事（筆者撮影、2016年）

見られることは、過去を想起する際には妨げとなることもないわけではないが、ポーランド人とユダヤ人が再び共にカジミェシュで新たな歴史を刻んでいく上では、大きな可能性を提供していると言えることができるだろう。

参考文献

- 須藤廣・遠藤英樹・山口誠・松本健太郎・神田孝治・高岡文章編著『観光が世界をつくる—メディア・身体・リアリティの観光社会学』明石書店、2023年
- 野村真理「ユダヤ人ネットワークの実像と虚像—「世界イスラエル連合」から『シオンの賢者の議定書』へ—」『東欧史研究』38号、2016年
- エンゲルキング、バルバラ（岩田美保訳）『「道義の問題が戸を叩く」—ユダヤ人大虐殺に対するポーランド人の姿勢』加藤有子『ホロコーストとヒロシマーポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』みすず書房、2021年
- コナトン、ポール（芦刈美紀子訳）『社会はいかに記憶するか—個人と社会の関係』新曜社、2011年

ブレブク、アニコー（寺尾信昭訳）『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』彩流社、2004 年
ポリアコフ、レオン（菅野賢治、合田正人訳）『反ユダヤ主義の歴史』全 5 巻、筑摩書房、2005 ～
2007 年
Olejniki, Leszek, *Polityka narodowościowa Polski w latach 1944-1960*. Wydawnictwo
Uniwersytetu Łódzkiego, 2003
Zubrzycki, Geneviève, *National Matters: Materiality, Culture, and Nationalism*, Stanford UP, 2017
Museum of the History of Polish Jews, *POLIN: 1000 Year History of Polish Jews*, 2014
Atlas Historii Żydów Polskich, Demart, 2009

自己の回復、山里の回復：修験道とツーリズムの交錯

Restoring the Self, Restoring the Mountain Villages: Intersections Between Shugendō and Tourism

ケイレブ・カーター

(九州大学人文科学研究院・広人文学 准教授)

はじめに

修験道はしばしば日本の山岳信仰の真髄と考えられる。修験道の多彩な側面は、やはり山岳信仰の伝統的な形と見ることができるが、伝統の形しか考えられないと、その外にある要素を見落としていることがある。そのひとつが観光である。近年、宗教学者は、少しずつこの二元論に異議を唱えてきた。⁽¹⁾ 本稿はその研究に重ね、近世と現代の日本の事例を通して、修験道のケースを考察したいと思う。

まず、修験道とは、その言葉自体を見ると「修行して特別な力を得る道」である。その力を得る道を、代表的な修験道学者の宮家準は一般的な百科事典の『日本大百科全書（ニッポニカ）』において次のように説明する：

日本古来の山岳信仰が、外来の密教、道教、シャーマニズムなどの影響のもとに平安時代末に至って一つの宗教体系をつくりあげたものである。このように修験道は特定教祖の教説に基づく創唱宗教とは違って、山岳修行による超自然力の獲得と、その力を用いて呪術宗教的な活動を行うことを旨とする実践的な儀礼中心の宗教である⁽²⁾。

更に項目は続くが、「ツーリズム」に関連する記述は出現しない。それは当然かもしれないが、これが一つの例である。「修験道」を辞典や百科事典で検索すればするほど、「ツーリズム」に関連する記述をほとんど見つけられないことに気付く。これについて考えてみたい。

実は、先行研究、あるいは一般的によく使われているイメージを考えれば、近年まで修験道の定義には、ツーリズムがあまり含まれていなかった。なぜなら、かつての宗教学者たちは、宗教とお金、あるいは宗教とポピュラーカルチャーを別物として考えることが多かったからである。宗教に対する考え方として、物質性よりも精神性、あるいは商売や蓄財よりも清貧、あるいは日常生活よりも教義が重要なものとして考

えられてきた。こうした二元論は、プロテスタント的な価値観の知的遺産として、今でも一定の影響力を保っている。

このような価値観は、私たちが宗教において許容できるものと許容できないものとを区別するのに影響を与えた。その結果、中世の苦行こそが修験道の黄金時代とみなされ、近世の巡礼や村での儀式は、墮落した修験道であると考えられている。しかし実際は、宗教とお金、物質世界、観光といったものは密接に結びついている。このように考えれば、それらがどのように交差し、互いに影響を与えているのか、またそれに目を向けることの重要性が理解できるだろう。

本稿では、修験道とツーリズムの交錯について、いくつかの例を通して考えてみたいと思う。まず、近世の例から始めるが、これによって宗教と観光との結び付きが、単に近代だけの現象ではないことを示す。次に、現代の修験道とツーリズムが出会う3つの例を紹介する。これらの例はすべてまったく異なるものであるため、歴史上の、そして現在における両者の交差が、いかに多面的なものであるかを示している。

1. 近世の事例：戸隠山

まず、江戸時代の戸隠山の事例から確認する⁽³⁾。戸隠山は長野県の北部の山脈に位置し、現在、戸隠を訪れると、深い山に位置する美しい神社が見える。しかし、明治初年に神仏分離が施行される以前は、戸隠山は天台宗によって管理され、その中で修験道は山の儀式、経済、アイデンティティの一部であった（図1）。

18世紀に戸隠が人気の巡礼地となると、参拝者を案内したのは修験道の山伏であった。戸隠は、登るのが技術的に難しい山であるため、もともとは修験者だけが山頂にのぼることができた。ただ、1701年からは、修験者が参拝者を案内して、両界曼荼羅と言われた高妻山と乙妻山に登るようになった。同時に、女人禁制が厳しくなり、これらの山に登ることが許されたのは男性だけであった。女性は女人堂までしか、参拝することができなかった。

いずれにしても、修験道が江戸時代の山岳巡礼と結びついていたことが明らかになる。これは、イメージとアクセスの関係であった。修験者のイメージは、他界的な山伏であり、困難な地形を進み、山の神と仏と直接交流し、山から特別な力を得る能力を持つ者たちであった。とにかく、全国の霊山が巡礼のために開かれたこの時期、山伏は山に登り、「講」と言われる団体を案内する、技術的専門知識を持つ存在だった。

このように、江戸時代、巡礼は一種の宗教的な観光であった。庶民が村から離れることを許された数少ない方法のひとつであり、美しい景色を眺めながら長い道のりを旅することが多かった。そして有名な寺社にお参りする以外の時間は、道中で酒やギャンブル、遊郭などを楽しんだ。修験道は、歴史家ナムリン・ホが江戸時代の「prayer



図1 江戸時代後半の地図を明治時代に写した物。(著者個人蔵。写真は Hill, Lachlan 撮影。)

and play」(祈りと遊び)と呼んだもののへのアクセスポイントのひとつであった⁽⁴⁾。

2. 現在の修験道とツーリズム

もちろん、今日の修験道は、江戸時代のそれとは大きく異なっている。修験道は明治時代に禁止され、1946年まで公認されなかった。そのため、修験者は歴史的な先例を調査することと、現代の人々の関心に対応することとを、組み合わせて活動している。言い換えれば、伝統に従うことと、新たなイノベーションによって適応することとを組み合わせている。

「伝統」と言えば、修験道の衣を着ること、峰入り、柴燈護摩、火渡りなどの儀式を行うこと、修験道の史跡で地域の伝統を復元することなどが例として挙げられる。同時に、「イノベーション」について言えば、自然、アウトドア活動、癒し、スピリチュアリティなど、現代の人々の新しい関心に注目することと結びついている。こうした関心に焦点を合わせるならば、近代的な観光の形態と、修験道の再興とは、交差している。

2-1. 新しい講

一つ目の例は東京を本拠として活動している新しい講である。創設者は東京に住んでいる社会人であり、金峯山寺で正式に修行を積んだ修験者でもある人が、10年以上前に始めた講である。匿名にするために M さんと呼ぶことにする。講の主な活動は法螺貝の稽古で、M さんは市内やオンラインで定期的に法螺貝のセッションを開いて教えるほか、週末や三連休には葛城、吉野、戸隠などへの旅を「先達」（つまり修験道のリーダー）として企画している。会員たちは、年齢も性別も職業もさまざまで、多くは 30 代から 40 代で、音楽、デザイン、建築などクリエイティブな仕事に就いている人も多い。そして、口コミで講の事を知る事が多い（図 2）。

この講に参加し、また様々な山々で、他のグループを観察した経験から、私は修験道の再興に二つの大きなパターンがあることに気づいた。一つ目は、「地域性を意識した再興の試み」である。修験道が明治時代に禁制となったことを受けて、各地で修験道の伝統が、一度途絶えた。しかし 1980 年代から現在にかけて、各地で復活している。その場合、ほとんどの山には、直接的な修験道の記憶はないが、修験道を復活させたいという関心を持つ人々が存在しているため、修験道の歴史的な中心地金峯山の修験者がこれらの地域を訪れ、修験道の復興を指導している。

戸隠と M さんの場合、神社の神主は 2003 年に古くから行われていた「柱松」という祭りを復活させた。しかし、神主と修験道とのつながりがなくなっていたため、M



図 2 戸隠山の九頭竜社で参拝している M さんの講。（著者撮影。2019 年。）

さんに柱松の中で法螺貝を演奏することで講に参加してもらうことにした。この祭りは3年ごとに開催され、Mさんの講も参加し続けている。この行事を通して、修験者と講は、神社に、その土地の過去のある面とのつながりを提供している。

二つ目は「自然と精神世界への関心の取り込み」である。例えば、一般人を山に案内し、山岳信仰の伝統に基づいた精神的な体験をさせるというものである。そこで彼らは神仏と交わり、自然の中で自分を取り戻し、そして山、美しい村、郷土料理、伝統的な宿泊施設を楽しむことができる。Mさんの講の参加者に話を聞くと、確かに彼らは、旅のハイライトとしてこれらの要素を挙げていた。

2-2. グローバル社会の中の修験道

二つ目の例として、ヨーロッパ出身の女性修験者で、先達をしているTさんを取り上げる。Tさんは熊野に住み、熊野や金峯山に関連する修験者に指導を受けている。仕事として、吉野地方や熊野地方を訪れる各国からの団体を案内している（図3）。

Tさんは、海外の人々の、修験道や自然のスピリチュアリティへの関心に応えている、外国人および日本人の行者の一人である。このような宗教ツーリズムは、日本だ



図3 修験道の創始者である役行者の母を祀る母公堂であり、著者は生徒たちと一緒にTさんに吉野の聖地と古道へ案内された。（著者撮影。2022年。）

けでなく世界的に見られる現象である。例えば、今は誰でも中国の道教の山を訪れて気功を学んだり、インドでヨガ・リトリートに参加したりすることができる。2004年に、吉野・熊野はユネスコの世界遺産に認定され、このような世界的なスピリチュアル・デスティネーションの風景の中に位置付けられ、宗教ツーリズムの目的地の一つとなった。

ユネスコの目的は、重要な文化遺産を保護することであるが、もちろん観光客を誘致することも、ユネスコの認定を得るための重要な動機となっている。その意味で、修験道は観光・経済にとって貴重な資源であり、修験道と観光の研究者、天田顕徳氏の言うところの「文化資源化」につながっている⁽⁵⁾。日本を訪れる観光客が、このような画像を目にすると、スピリチュアルな体験ができる神秘的な場所という感覚が呼び起こされる。

こうして、世界中の人々が、以前よりも修験道について知るようになっていく。ある地域の宗教的遺産について知りたい人と、体験したい人もいる。また、Tさんのように修験道をより深く紹介してくれる人を求める人もいる。いずれにしても、長期的な経済衰退に直面している地域の住民にとっては、経済的なメリットがある。ちなみに、以上の二つのケースには、近世における修験道との連続性、あるいは共通性が見られる。それは、修験道の先達が一般人を山に導くということである。そして、そのような活動を通して、修験者自らも修行を行っている。

2-3. 修験道・登山・企業

山への関心がアウトドアスポーツにつながることが多いため、消費者の需要に応えようとする新世代の企業が生まれている。そのひとつ、株式会社ヤママップ（YAMAP）はハイキングと修験道を結びつけようとしている。YAMAPは、ハイカーを支援するデジタルプラットフォームとして2013年に設立された。YAMAPのアプリは日本で最も人気のあるハイカー向けアプリとなっている。このアプリで、ユーザーはハイキングの詳細情報を検索し、地図をダウンロードし、GPSで自分のハイキングを記録することができる。YAMAPはこの技術的な機能だけでなく、ユーザーが情報や写真を共有し、登山文化を中心とした共通の価値観を育むことで、コミュニティの構築を試みている。興味深いことに同社は、修験道を、このコミュニティとユーザーに意義をもたらす重要な手段だと考えている。

このためYAMAPは、修験道で知られる山村地域で、地方活性化キャンペーンを実施している。例えば、歴史的な修験道ルート（「峰入り」と呼ばれる）を復元し、先達と連携して日帰り、あるいは宿泊付きの修験道ガイドツアーを開発したり、修験道の特集した記事をオンラインマガジンに掲載したり、修験道に関する高画質の動画をYouTubeにアップロードしたりしている。

その中心は紀伊半島の吉野地方と葛城山、そして九州の英彦山である。これらはすべて修験道の歴史的な中心地であった。また、これらの地域は、地方の過疎化や、地域経済の停滞の影響を受けている地域であり、YAMAP は修験道の文化遺産を、観光資源、かつ潜在的な利益の源泉と見なしている。

英彦山の例を挙げると、中世から近世にわたる二つの峰入（春峰と秋峰）があり、近年、地元の修験者たちが、明治時代には廃れてしまっていたこの二つのルートを復活させた。YAMAP は 2021 年から、YAMAP と英彦山神宮と福岡県観光連盟の共同企画により、この二つのルートと、もう一つの「御汐井取り」という伝統的な行事によるルートを合わせて、英彦山に関わるこれらの三ルートをデジタル地図、短編映画、オンライン記事などを用いて宣伝している。

YAMAP は他の方法でも英彦山につながるルートを宣伝している。2023 年の秋、ルートを歩いて英彦山神宮を訪れると、YAMAP が製作した限定版の手ぬぐいが無料でもらえた。また「“英彦山巡礼路” デジタルバッジキャンペーン」も行われている。このデジタルバッジは、期間中に YAMAP アプリで活動記録を取りながら、指定のランドマークを通過すると手に入れることができる。

更に、YAMAP は「山伏が歩いた峰入道を辿るツアー」などのパッケージツアーを提供することを計画している。修験道と YAMAP のつながりを研究している九州大学人文科学府博士課程の学生が、2022 年 12 月にそのようなトライアルツアーに参加した(図 4)⁽⁶⁾。彼は、YAMAP がツアーを通して本物の修験道の体験——彼らは「修験感」という言葉を使った——を作りたいと熱望していることを知った。とはいえ、商業的に成り立つだけの参加者を集めるのは難しいようである。

しかし、いずれにしても、YAMAP はこうした様々な取り組みを通じて、ユーザーに英彦山修験道を紹介し、「歩くことと祈ること」を促している。このメッセージは YAMAP の企業使命の中心にあるようである。創業者の春山慶彦氏は修験道に特別な関心を寄せており、2022 年のインタビューでこのように語っている。

英彦山は YAMAP の本社がある博多からも近く、修験道の名残りを色濃く残す歴史と自然、その両方の魅力を併せ持つ人気の山です。英彦山で受け継がれてきた修験の文化は、私たち人類の財産でもあります。英彦山には、近代のアルピニズム的な登山よりもっと前の、日本人が持っていた自然と一体化する登山観が今も残っています。修験道にスポットライトを当てることで、スポーツでもない、ただ自然を楽しむだけでもない、「歩くこと」と「祈ること」がつながっている登山を、現代によみがえらせることができたらと思っています⁽⁷⁾。



図4 YAMAPの修験道のトライアルツアーで山伏が英彦山の道を歩いている。(Him, Han Cheuk 撮影。2022年。)

この文章で春山は、現代におけるアウトドアスポーツの大きな特徴として、アウトドアスポーツに、単なる肉体的な動き以上の何かを見出すことを挙げている。例えば、日常生活を超越し、精神的な動機を満たす、といった要素である。このようにYAMAPは、山岳活動と、精神性という人々の二つの関心を相互に関係させることで、古い伝統である「修験道」と、今日人気であるアウトドアスポーツを結びつけている。YAMAPを小規模な講の運営に比べるならば、YAMAPは世話人、さらにはデジタル先達の役割を担い、ハイカーの大規模なコミュニティに修験道を紹介し、彼らのハイキングに新しい意味をインプットしている。

おわりに

『宗教年鑑』に掲載された統計によると、古い山岳信仰の講の会員数は長期間にわたって減少し続けている。その一方で、「修験道」というものは、国内外を問わず、一般の人々の関心を少しずつ集めるようになっている。霊山に近い地元の住民たちは、自分たちの過去とつながる方法として修験道を利用してきた。他方で、現在において

修験道に関わる「個人」に目を向けるならば、彼・彼女は、修験道を、山を訪れ、精神的な回復を得るための方法として捉えている。

修験道はまた、観光の可能性が認識されるにつれ、大規模な経済プロジェクトや企業プロジェクトにも組み込まれてきた。しかし、このような大きなプロジェクトが成功するかどうかは、そもそも修験道が、より小さな共同体や、個人のレベルにおいて、どれだけ共感され、そしてどれだけ支えられているのかによって、決まるだろう。

注

- (1) 山中弘編、『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』、世界思想社、2012年。Bruntz, Courtney, and Schedneck, Brooke eds. *Buddhist tourism in Asia*, University of Hawai'i Press, 2020. Reader, Ian. *Religion and tourism in Japan: Intersections, Images, Policies and Problems*, Bloomsbury Academic, 2024.
- (2) 宮家準、「修験道」項『日本大百科全書（ニッポニカ）』、小学館（Shogakukan Inc.）。*JapanKnowledge* 上で2024年5月23日に閲覧。
- (3) Carter, Caleb Swift. *A Path into the Mountains: Shugendō and Mount Togakushi*, University of Hawai'i Press, 2022.
- (4) Hur, Nam-lin. *Prayer and Play in Late Tokugawa Japan: Asakusa Sensōji and Edo Society*, Harvard University Asia Center, 2000.
- (5) 天田顕徳、『現代修験道の宗教社会学：山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化』、岩田書院、2019年。
- (6) Him, Han Cheuk, "Revitalizing Shugendō in the Digital Age: The Case of Yamap," 九州大学人文科学、修士論文、2023年。
- (7) 米村奈穂、「英彦山再興プロジェクト：峰入り道をゆく巡礼ツアー」、*YAMAP Magazine*、2022.02.28、<https://yamap.com/magazine/34219>。

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

**2023年度国際研究フォーラム
「見られることで何が変わるのか
—ツーリズムと宗教文化」報告書**

令和7年2月28日 発行

発行者 平藤喜久子

編集担当 星野 靖二

吉永 博彰

川嶋 麗華

印刷所 株式会社 丸井工文社

発行所 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237

